「碍」の字表記問題再考（11）

おやさと研究所嘱託研究員
天理大学非常勤講師
八木　三郎　*Saburo Yagi*

本連載において「障碍者」の表記を縷々検証してきたが、今回はさまざまな絵巻物や歴史的文書に登場する障害者像を紹介したい。

絵巻物にみる障害者像

平安、鎌倉時代の文書のなかに絵を主体にして情景を描写する「絵巻物」が数多く残されている。その一つである「病草紙（やまいのそうし）」には、今でいう「脊椎カリエス」「白内障」「統合失調症」などの様々な疾病や障害が描かれている。なかには、現在わが国の国民病ともいわれる「糖尿病」までが描かれているのには驚くばかりである。この絵巻物を見る限り、現代社会特有といわれる生活習慣病も実は遠い昔から存在し、人々の憂いになっていることが「病草紙」から読み取れる。

絵巻物に多く登場するのが「躄車（いざりぐるま）」である。「躄」という言葉は、現在では不適当用語として扱われ、記述を目にすることはない。しかし、過去には肢体不自由の歩行困難な状態を表す言葉として使われていたのである。

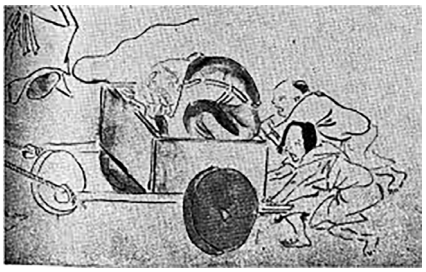

図１　年中行事絵巻「躄車」（椙山女学園大学所蔵）

躄車は車いすともいうべきだろうか。今の時代であれば、歩行困難を補助する器具が種々用意されているが、遠い昔では自ら歩行できなければ、生活上での移動でかなり困難を極めたことは想像に難くない。十返舎一九の『東海道中膝栗毛』では、一日に30㎞から40㎞歩くと書かれているが、旅の「絵巻物」のなかにも躄車が多く登場している。そのなか、四国八十八カ所の札所を巡礼する「お遍路」でも躄車の記録が残っている。

図２　お遍路の躄車（椙山女学園大学所蔵）

四国の伊予、讃岐、土佐の地域では遍路のことを「へんど」というのが一般的だという。漢字では「辺土」と表し、四国内の辺地を巡礼するという意味からへんどと言うらしい。このへんどには、「よたてへんど」「おげへんど」「いざりへんど」などがある。よたてへんどは巡礼を生業とする人を意味し、おげへんどとは、遍路をよそおって人々の同情をかう別名、だましへんどをいう。いざりへんどは、歩行困難な者が躄車を使って遍路を行うことを意味する。村や街道筋の人々はこの躄車を見つけると近くの人を呼び、村境まで押して行ったといわれている。それが自らの功徳になると考えられていた。

歴史上の人物

265年間の江戸時代において、障害があったと推測される徳川将軍が２人いる。それは、第９代将軍・徳川家重と第13代将軍・徳川家定である。

徳川家重は、正徳元年（1711）に第８代将軍・徳川吉宗の長子として誕生している。江戸幕府の公式史書である『徳川実紀』によれば、家重は生まれながらにして虚弱であり、言語が不明瞭であったと記されている。そのため、周囲の者は理解することができず、側近の間では将軍の継嗣として不適格とみなされ、廃嫡の話まで出ていたようである。しかし、将軍継承は才能云々ではなく、「現将軍の長子が継承する」という吉宗の思いにより、長男である家重が第９代将軍として受け継いだのである。

次に、第13代将軍の徳川家定は文政７年（1824）に第12代将軍・徳川家慶の４男として誕生している。この家定も幼少の頃より病弱と記録されている。加えて、人前に出ることを極端に嫌ったと記されている。父である第12代将軍・家慶は家定の器量を心配し、後の第15代将軍になった徳川慶喜を家慶の継嗣にまで考えていたという。しかし、老中などの反対により家定を将軍継嗣としている。

この家定が第13代将軍となったのは、嘉永６年（1853）の「黒船来航」の時である。マシュー・ペリーがアメリカ大統領の親書を渡すことを目的に浦賀（横須賀）に黒船で来航し、それを契機に徳川幕府は鎖国から開国に歩み始めた。翌年、日米和親条約締結以降に初代駐日公使としてタウンゼント・ハリスがわが国に駐留している。そのハリスが記した『日本在日記』のなかに将軍・徳川家定に謁見した様子が残されている。ハリスが家定に挨拶を述べた後に、家定が次のように答えたと書かれている。

> 遠方の国から、使節をもって送られた書簡に満足する。同じく、使節の口上に満足する。両国の交際は、永久につづくであろう。

この時、家定は床から２尺ほど高くなった所に設けられた椅子にこし掛け、その前には天井より簾がかかっていて、家定の姿を見ることができなかったと記されている。しかし、簾越しに見える家定について、ハリスは次のように書き残している。

> 大君は自分の頭を、その左肩をこえて、後方へぐいっと反らしはじめた。同時に右足をふみ鳴らした。これが三、四回くりかえされた。それから彼は、よく聞こえる、気持ちのよい、しっかりした声であった。

この家定の言葉を発するときの身体反応、様子から脳性麻痺であると考えられる。

江戸時代に登場する障害者像は上述するほかにも数多く存在する。なかでも、高名な盲人の国学者として知られているのが塙保己一（はなわほきいち）である。塙は海外にも名を馳せ、三重苦で知られるヘレン・ケラー女史の自叙伝にも登場している。ヘレン・ケラーは「私は子どもの頃、母から塙先生をお手本にしなさいと励まされて育ちました。今日、先生の像に触れることができたことは、日本訪問における最も有意義なことと思います。」と昭和12年（1937年）にわが国に来日したときに、塙の銅像に触れながら挨拶のなかで語っているのである。

［引用・参考資料］

坂田精一訳『ハリス日本滞在記』（下）、岩波書店、1954年。
堺正一『塙保己一とともに―ヘレン・ケラーと塙保己一』はる書房、2005年。
多氣千恵子『巡礼と遍路』香川県立図書館、2006年。